

オーストリアの山旅

塩野七生さんの『ローマ人の物語』を読んでいる。6月19日から27日にカナディアンロッキー、7月1日から10日がオーストリアと“地球を遠足”が決まっていたので、この二つの山旅で文庫本『ローマ人の物語 8・9・10 ユリウス・カエサル ルビコン以前上・中・下』を読もうと思い3冊をザックに入れて、まずはカナダへ。海外は疎いから、手近な参考書として『地球の歩き方』を手にすることが多い。カナディアンロッキーには『カナダ』、オーストリアには『ウィーンとオーストリア』を携行。

27日にカナダから帰国し、1日再び成田にむかった。京成スカイライナーの指定座席に腰を下ろし、『ウィーンとオーストリア』を開く。オーストリアの山といえば、まずチロルが浮かびあがる。次にグロスグロックナーとその周辺、ぼく自身そのあたりのハイキングは数回経験している。しかし、今回は趣を異にしていた。成田からウィーンに飛び、乗り換えて着陸したのはクラゲンフルト。東西に延び、ウィーンのある東の方がふくらんで、オタマジャクシのような形をしたオーストリアのほぼ中央南部、スロヴェニアとの国境近くに位置しているのがクラゲンフルトである。

荷物を受け取り、現地ガイドのウルフさんに乗せられたバスが北方向に30分ほど走った先がアルトホーフェンのホテル、プレヒテルホフだった。時間は12時近く、日照時間の長いこの季節でも周辺は静かで真っ暗、どんなどころなのか見当もつかない。部屋に入り、早々にベッドに潜り込む。

6時モーニングコールで目を覚まし、7時からの朝食に階下に降りる。ビュッフェスタイルなのでお皿にパンとハムとチーズを取り、テラスに出る。目の前に広がる光景に息を飲む。ホテルは丘の上の旧市街にあった。テラスから眺める光景は見渡すかぎり緑が広がって、雄大にして爽やか。今回のツアーリーダーはアルパインツアーの社長、芹澤健一さん。芹澤さんはぼくたちをここに連れてきたかったようなのだ。アルトホーフェン旧市街を構成する家々のたたずまいがまたいい。街中を散歩しているだけで、気持ちが癒される。芹澤さんが意図する新しい切り口の、オーストリアの山旅が始まった。

塩野さんの本が3冊目、『ローマ人の物語 10 ユリウス・カエサル ルビコン以前・下』に入った。「ガリアとゲルマンの比較論」という項があって、「ガリアでは、町や村ごとに必ず、家庭内も、と言ってよいくらいだが、複数の派閥が存在する」と指摘している。このことが頭にひっかかった。前後して『ウィーンとオーストリア』を何気なく開いた。そのページに池内紀さんのコラム「オーストリア人の郷土意識」があった。どこで生まれてもオーストリア人であるはずだが必ずしもそうでなく、チロル生まれはチロル人、ザルツブルグ生まれはザルツブルグ人……。カエサルのおかげで、その話しがすんなり受け入れられた。